身体拘束廃止に対する利用者家族とスタッフの意識

身体拘束を廃止し16年経過した今、改めてケアを考える

熊澤誠[1] 木村聡[1] 滝原典子[2] 美原恵里[3]

1）介護老人保健施設アルボース介護福祉士

2）介護老人保健施設アルボース看護師

3）介護老人保健施設アルボース施設長

[はじめに]

当施設では、利用者の尊厳を大切にし、その人らしく安心して生活できる場を提供するために、平成12年3月、身体拘束廃止への取組みを開始した。当初、職員に対しては身体拘束を行うことの弊害や高齢者の尊厳について、また、利用者ご家族に対してはなぜ身体拘束を廃止するかを説明し理解を求めた。そして、平成13年1月には身体拘束を完全に廃止した。その後16年間、身体拘束は一切行っておらず、拘束という言葉すら聞かれなくなった。身体拘束廃止後に転倒や転落による骨折事故が懸念されたが、件数の増加はなかった。

現在、当施設は群馬抑制廃止研究会の事務局を務め、群馬県内の病院や介護施設に対して身体拘束廃止の啓発活動を行っている。しかし、活動している中で身体拘束廃止が進んでいない施設が少なくない現状を目の当たりにし、疑問を感じた。そこで今回、ご家族と職員の双方の意識を調査し、それぞれの立場からの希望や求められるケアについて検討したので報告する。

[対象]

認知症専門棟利用者のご家族23名と当施設の全看護介護職員73名を対象とした。

[方法・内容]

利用者の家族に対しては、「身体拘束に対する思いと身体拘束をされている利用者の様子」、および「当施設が行っている身体拘束廃止に対する不安と身体拘束をされていない利用者の様子」について選択式アンケート調査を実施した。職員に対しては、「身体拘束廃止することによる利用者の様子の変化」、および「身体拘束廃止を実践することの負担や思い」について選択式、記述式のアンケート調査を行った。

[結果]

利用者の家族に対するアンケートでは、(1)「過去に身体拘束されていたことがあるか」の設問で、16件(69.6%)で拘束された経験があると回答した。身体拘束されていた経験があると回答した家族に対して(2)「身体拘束されている姿を見てどう思ったか」の設問では、「気になるが仕方ない」15件(93.8%)であった。(3)「身体拘束されている様子について」は15件(93.8%)で「変化あり」と回答した。その理由は「元気がなくなった」が最も多く、次に「寝ることが多くなった」「認知症状が進んだ」の順であった。(4)「アルボース入所にあたり、身体拘束をしないと説明された時どう思ったか」の設問では、「や

や不安に感じた」が8件(50.0%)で最も多く「あまり不安には思わなかった」が7件(43.8%)の順であった。(5)「アルボースで身体拘束をしないことで、本人の様子に変化が見られたか」の設問では、「変化あり」が15件(93.8%)であった。その理由は、「明るくなった」「表情が豊かになった」「認知症状が落ち着いた」の順であった。(6)「身体拘束を行わなくなってよかったと思うか」の設問では全家族が「よかったと思う」を回答した。

職員に対するアンケートでは、(1)「身体拘束をしたことがあるか」の設問で、26件(35.7%)が「経験がある」と回答した。経験がある職員で、身体拘束を外すことで「BPSDは減った」と回答した職員は、19件(73.0%)であった。その理由は、「明るくなった」が最も多く、次に「表情が豊かになった」の順であった。一方、経験が無い職員で、「BPSDが減った」と回答したのは、19件(43.2%)。「かわらない」が17件(38.6%)であった。

(2)「業務の中で身体拘束したいと思ったことはあるか」の設問では、「思ったことがある」が46件(71.4%)であった。その理由は、「転倒の危険性を感じた時」「精神的に余裕がない時」の順であった。部署間では、認知症専門棟の職員が19/23件(82.6%)で最も多かった。(3)「当施設が行っている身体拘束廃止についてどう思うか」の設問では、ほぼ全職員が賛成と回答した。その理由は、「身体拘束をしていては、その人の尊厳を守ることができない」等の意見や「身体拘束をしないことで活き活きした姿を実感できた」「身体拘束をしなくてもケアで対応できている」等の経験による意見も多く挙げられた。

[考察]

家族へのアンケート結果からは、病院や施設等で行われた身体拘束により、元気がなくなり認知症状が進んだと感じながらも「気になるが仕方ない」という回答が多かった。家族が病院や施設側に本音が言えない背景があると思われた。当施設で身体拘束をしないことに対して不安を感じる家族もいたが、利用者が穏やかに生活する姿を目の当たりにすることができていた。そのことが、身体拘束をしないことへの不安軽減や身体拘束を外せてよかったという実感に繋がったと思われた。職員のアンケート結果から、経験がない職員は、BPSD減少の変化を感じづらかった。また認知症専門棟の多くの職員が業務の中で身体拘束をしたいと感じていた。認知症状への対応から転倒の危険性を感じ、精神的に余裕がないことがその要因であった。そのような状況においても、当施設の職員は身体拘束廃止に賛成していた。それは、16年間継続して行ってきたこの取組みから、「身体拘束しないことが当たり前」という施設全体の風土が作り上げられたこと、職員一人ひとりが利用者の尊厳を支えるという強い気持ちで、ケアできていたからだと思われた。

[まとめ]

身体拘束に関する家族と職員の意識を調査し、それぞれの立場からの希望や求められるケアについて調査した。家族は、身体拘束しないケアに不安を感じながらも、利用者が元気になり活気を取り戻す姿を目の当たりにすることで、身体拘束をしなくてよかったと実感していた。一方、身体拘束廃止を進めるためには、家族の理解だけでなく職員の理解も必

要である。そのためには、施設全体が強い信念で「身体拘束しない」ことを統一する必要がある。そのような環境から、利用者の尊厳を支えていくケアができるのだと思われた。身体拘束を廃止し16年経過した今、利用者家族と職員の意識調査を行った。身体拘束に頼らないケアを実践できるのは、取組みの意義を家族も職員も理解し利用者の尊厳を支える意識を持ってケアしていたからである。

発表形式：口演

カテゴリ1群：101入所

カテゴリ2群：206データのある「効果」の提示

カテゴリ 3 群：A3306 身体拘束ゼロ